

ドン・ジョバンニの譜面を読んで思った事

最近、あるオペラ歌手に「ドン・ジョバンニの中のドンナ・エルヴィラの役柄を習得しないとイケないので、手伝って欲しい」と頼まれました。ピアノでオペラのオーケストラ・パートを弾きつつ、歌手の練習に付き合い、不正確な箇所があれば訂正してあげる。また二重唱、三重唱のような場合は一緒に他の声部を歌ってやったりもする。こういう仕事は「声楽コレペティション」というもので、ピアニストの重要な仕事分野の一つです。自国語（つまり日本語）がドイツ語やイタリア語とあまりにかけ離れている為、音の高さや強弱についてはともかく、言葉のニュアンスを理解して不正確な発音を矯正する、といった、ヨーロッパ人なら簡単に出来ることが私にはやりにくい、というハンディ（コンプレックス？）があって、そういう仕事は今までなるべく避けてきましたが、今回は歌手がドイツ人ですし、話し方について私がどうこう言う必要はないと思い、引き受けたわけです。

そうは言っても、その役柄の歌い方を教える以上は、物語そのものがよく理解できていないとお話にならないので、リハーサルに先立ち、譜面をゆっくり通して読みました。

このオペラは何度も見たことがあり、全体のあらすじは勿論知っていましたが、歌詞のすべてをドイツ語訳で読みながら自分で歌ってみて今更ながらびっくり。なんと不謹慎な歌詞でしょう！ドン・ジョバンニはプレイボーイなどという格好いいものではなく、ひどいならず者の女たらしです。例えば、レポレロの「カタログの歌」。「ここに、自分が書いたカタログがあります、彼（ジョバンニ）がしとめた女はイタリアに640人、ドイツに・・・、フランスに・・・、トルコに・・・、そしてスペインには1003人もいる、云々」と延々と続く。この破廉恥な歌詞に天がけるような明るく楽しい音楽がついているのですから、不思議な気分になります。また、彼に捨てられてからも忘れられず、追いかけているドンナ・エルヴィラの歌も、歌詞そのものから感じられるような深刻な悲劇的雰囲気はあまりなくて、どちらかというと滑稽で面白可笑しい。やや似通った女たらしの貴族が登場するベルディのリゴレットとでは大違いです。ドン・ジョバンニの筋と音楽は異質じゃないですか、と言った人もあるので、そのことについて考えてみました。

ドン・ジョバンニの音楽が筋とは異質、という感じがするとすれば、それは何故でしょうか。ひとつには、ジョバンニの行動、つまり女とみれば言い寄る、そして手に入れた後はさっさと逃げる、という行動が当時は一般的にそれほど不快感をもたらすものではなく、「軽薄なならず者」を極端化したものにすぎない事。これが殺人鬼とかなら話は別です。（ジョバンニは初っぱなでドンナ・アンナのお父さんを殺してしまい、それが彼が地獄落ちする直接の原因になっていますが、この殺人は彼女に誘惑を試みた事による副産物にすぎない。）ジョバンニ的な面を幾分かは大抵の男が持っているので、話が愉快地に感じられるし、オペラ・ブッフアの筋であり得るのでしょう。だから音楽も軽快なものでいい。深刻な悲劇ではなく、あちこちで笑わせるためのオペラで、こういうことをしていると地獄に

落ちますよ、という教訓でしめくくりになるわけです。

それともう一つの理由として、モーツァルトは長調で作曲するのを好み、短調はごく例外的にしか用いなかった。このことは、ピアノ協奏曲24曲中、短調で書かれたのはたったの2曲であること、ピアノソナタでも18曲中2曲であることを見ると明らかです。これは一つには時代背景があるのだと思いますが、そのことについてはまた次回にでも述べることにしましょう。ともかく、モーツァルトは主として長調で作曲しましたが、だからといって何時も陽気で楽しい気分の曲ばかり書いていたわけではありません。実際、よく知られているように、モーツァルトには哀しい長調の曲がたくさんあります。有名なK.331のソナタを見てみましょう。イ長調で書かれた第1楽章はどちらかというと物悲しい雰囲気はただよっているのに対し、イ短調で始まる終楽章（トルコ行進曲）のほうは賑やかで、哀しいとは言い難い。ここでは短調はトルコ風でエキゾチックな効果を出すために使われているのであり、悲しさを表現するためではありません。このようにモーツァルトでは「楽しければ長調で悲しければ短調」という定義は必ずしもあてはまらない。だから、ドン・ジョバンニでも、もっと後の時代の作曲家なら短調で書いたであろう悲しい部分を、時には長調で表現しているのかもしれませんが。

思いつくままに長々しく述べましたが、言わんとするところは、モーツァルトの時代の人々にとって「ドン・ジョバンニの筋と音楽が異質」という事はなかった、という事です。それだからプラハの初演でも大成功したのに違いない。こういう風に述べると、私がドン・ジョバンニにケチをつけているように受け取る方がおられるかもしれませんが、それは誤解です。何にしても、この音楽はどうしようもないくらい美しい。そしてまた、作曲技法の素晴らしい事ときたら。有名な第一幕のフィナーレ、メヌエットのところなど、豪快にパーティーを楽しむふりをして農民の娘ツェルリーナを誘惑しようとたくらんでいるドン・ジョバンニ、いやいやながらも彼の手伝いをしてツェルリーナの花婿であるマゼットを引き止めるべく一緒に踊る従者のレポレロ、ジョバンニに復讐を狙っているドンナ・アンナの一行、登場人物それぞれのせりふ、気分にあわせて、3つのオーケストラがそれぞれ違った拍子（ゆっくり3拍子と速い3拍子、それに2拍子）で同時に演奏するのですから。こんな技法はラヴェルのピアノトリオでしか知らなかったのが近代的な発明かと思っていれば、なんとモーツァルトが既に使っているではありませんか。